

カントウータ

Cantuta

No. 10

平成 18 年 11 月 28 日発行

社団法人日本ボリビア協会

協会からのお知らせ

新会長に林屋永吉氏

去る 6 月 23 日当協会の定時総会が開催され新会長に林屋永吉氏が選出されました。

山下徳夫前会長には、長い間、決して潤沢とは言えない当協会の台所事情にもかかわらず、健全な団体として存続できるようご指導を頂きました。出席者全員の要望もあり、今後も名誉会長として留まっていたくことになりました。また、ラテンアメリカ医学協会会長として、ボリビア医学界との交流を深めてこられたサンアンドレス大学の名誉教授でもあられる田中茂医師に新たに、相談役に就任していただきました。新役員の顔ぶれは次のとおりです。

名誉会長 山下徳夫(元内閣官房長官)
相談役 田中 茂(朝霞厚生病院院長)

会長 林屋永吉(元ボリビア大使)
副会長 杉田房子(旅行作家)

大貫良夫(東京大学名誉教授)
専務理事 渡邊英樹(元 JICA 職員)
理事 長崎 弘(元ペルー大使)
国本伊代(中央大学教授)
小川秀樹(在大阪名誉総領事)
嘉手苺義男(在沖縄名誉領事)
細野 豊(詩人・駿河台大講師)
今村忠雄(海外協会会長)
長嶺為泰(元ブラジル銀行)
細萱恵子(元海外青年協力隊)
白石健次(元 JICA 業務部長)

監事 佐々木仁(元 JICA 職員)
金木克公(元 JICA 職員)

サンタクルス市日系人協会 創立 50 周年祭へ寄付

去る 9 月 16 日に開催されたサンタクルス市日系人協会創立 50 周年の行事に対しまして寄付金を募りましたが、総額 128,000 円のご寄付が寄せられ全額をサンタクルス日系人協会に寄贈いたしました。同協会より感謝状の楯が送られてまいりましたが、ここにご寄付を賜った皆様に対しまして厚くお礼申し上げます。ご寄付を頂いた方々は次のとおりです。(金額別・五十音順)

・小川秀樹 理事	50,000.
・山下徳夫 名誉会長	10,000.
・林屋永吉 会長	10,000.
・渡邊英樹 専務理事	10,000.
・宮良多鶴子 会員	7,000.
・大貫良夫 理事	5,000.
・佐々木仁 監事	5,000.
・白石健次 理事	5,000.
・長嶺為泰 理事	5,000.
・細野 豊 理事	5,000.
・国本伊代 理事	4,000.
・杉田房子 理事	4,000.
・島袋陽子 会員	4,000.
・細萱恵子 理事	4,000.

計 128,000.

岳南 356 会に感謝!

=ボリビアンチャリティゴルフコンペ=
今年も本土におけるボリビアンチャリテ

ィゴルフコンペを7回開催しました。

5月には『北国の春』『すきま風』の作詞家のいではく氏をメインゲストとする八ヶ岳高原カントリークラブの『北国の春杯』に参加された同氏の同級生の皆様方より39,000円のチャリティ資金のご協力をいただきました。ここに岳南356会の皆様に心よりお礼を申し上げます。

このご寄付を含めてチャリティゴルフコンペから頂きました寄付金の総額は¥126,000円となりました。この資金は協会内に寄付金の基金として積み立てをし、ボリビアの災害や福祉施設等への支援に当てて参ります。

なお第3回を迎えます当協会と沖縄ボリビア協会共催の『沖縄移住地支援ゴルフコンペ』は来る2月11日に沖縄本島のオリオン嵐山ゴルフ倶楽部で開催の予定です。

林屋会長の米寿の会

10月4日夕、サラマンカ友の会の関係者等の肝いりで国際文化会館にて、当協会林屋永吉会長の米寿の会が誕生日の当日、盛大に開催されました。88才とはとても思えないお若さ、背筋もしっかり、シャキツとしたお姿のご立派さ。同じく華やいだ若さをたたえた林屋夫人のお姿も目立ちました。この年代でご夫妻共々お元気なのは、そう類を見ないとスピーチなさった方がいらっしゃいましたが、たしかにお幸せなご夫妻です。スペイン語の実力は日本一は当然のこと、スペインやメキシコ大使としてご活躍なされた実績の数々が皆様のスピーチから披露され、人脈の広さ、人望の深さにあらためて感じ入りました。

スペイン人の演奏に続き小松原庸子さんグループの華麗なるフラメンコの演奏が続き、華やかな米寿の会でした。

(以上、事務局より)

ボリビアの話題

識字教育プロジェクト開始

(EL DEBER 4月2日より)

エボ・モラレス大統領は少年時代から勉強ができない環境で過ごした経験もあり、また、大統領になる公約の一つに挙げた経緯から、就任後ただちに文盲者100万人を対象にキューバの支援で識字教育を国内で実施することになった。

キューバでのプログラムを、ボリビア国内にマッチした内容に若干変えたものとなっている。この計画は15歳から55歳までの文盲者を対象としており、まったく読み書きができないものを対称にするクラスと、若干できるものを対称にするクラスの2クラスに編成されている。身体障害者へのクラスも並行して実施される。

期間は2年半で終了し、現在、スペイン語での教材を使用しているが、ケチュア、アイマラ、グアラニ語での教材も用意中である。キューバはこの計画にテレビとVHS各3万台、2千台のソーラーパネルを無償援助している。

モラレス大統領は、文盲(アナルフアベティスモ)対策とは別に、身分証明書を持たない国民に対して簡単な手続きで所得できる処置を実行しており、18歳までの百数万人が身分証明書を得ることができるようになった。

農業のニュース サトウキビ栽培

(EL DEBER 7月2日より)

サトウキビ栽培は砂糖の国際相場の値上がり、オイル値上がりに因んで各国でエタノールをガソリンに混入した燃料利用のブームにより世界的に需要が伸びている。近い将来はディーゼルにも混入させて、燃料としての実現も考えられ、サトウキビからエタノールを生産する動きが大きくなっている。特に隣国のブラジルでは日系商社によって各地で製糖工場の建設と大規模なサトウキビ栽培が実現している。

世界一お金持ちのマイクロソフトのピ

ル・ゲイツ氏もブラジルでサトウキビ栽培とエタノール生産に乗り出している噂がでるほどだ。

サンタクルス県内でもサトウキビ栽培はブームになっており、牧場をサトウキビ畑にしている農家もいるくらいである。

砂糖の国際相場はトン当たり500ドルと急激に値上がりしており、これに伴いサトウキビも値上がりして生産者は製糖工場渡りで昨年はトン当たり13ドルであったが、今年は24ドルとなっている。サトウキビ栽培者は1ヘクタール当たり2千ドル前後の高収入を得ることができ、すでにサトウキビの新規栽培、増反が著しく進められている。この価格高騰は一時的なものではなく、地球規模のオイル不足と密接な関係があり、長期的になる事からサトウキビの栽培管理作業も改善され、来年は化学肥料も不足気味になる可能性も出てくる事が予想される。

稲作は価格低迷で今後2～3年は思わしくなく、養鶏事業も鳥インフルエンザが流行すれば将来性は無い。移住地の基幹産業の一つとして、エタノール生産を目的としてのサトウキビ栽培と製糖工場の建設について検討することも必要だ。

大統領の生家を国家遺産に

(EL DEBER 8月17日より)

エボ・モラレス大統領は8月4日、自らの出身地のオリノカ村にあるアドベ(土壁)で作られた自分の家を歴史建造物と国家遺産として宣言する法令第8807号を交付した。オル口のカーニバル祭とカリヤワヤ文化をユネスコに無形文化遺産としての登録に寄与した歌手のスルマ・ユガルさんや歴史家のテレサ・ヒスベルトさんは、大統領の思い上がりでエゴに反発している。

モラレス大統領は就任後6ヶ月間しか経過しておらず、国のために特に偉大な業績も行っていない段階において、本人自ら国家遺産に宣言するには時期が早い。本来は大統領として国のために偉大な功績を残し、その功績が国民に認められ、関係機関

や国民から国家遺産として残そうとする話が上がってくるのが自然。大統領に就任早々、自分が生まれ育った家を法令で国家遺産に宣言することはおかしいのでは、と批判されている。

コカの効用

(Japan Alternative News for Justice And New Culture)

ボリビア・ペルー・コロンビアでコカの葉から薬品、飲料、石鹼、ガムなどを製造するマイクロビジネスは、エボ・モラレスの手腕に希望を託している。

コカインの原料として悪者扱いにされているコカ葉市場で商売をする人々は、限られた範囲での販売を余儀なくされていた。だが今、ボリビア初の先住民出身のモラレス大統領がコカ葉の国際的な合法化を画策していることから、アンデスの厳しい経済がコカ製品の輸出が可能になって上向くのではないかと期待が高まっている。

コカは牛乳や牛肉と同じくらい栄養価が高く、アンデスの先住民は古代から薬や宗教的儀式に利用してきた。だが1960年代に米国はコカの国際取引を禁止し、一方で非合法の密貿易が巨大市場に拡大した。コカ撲滅を目指している米国の政策を変えさせるというのがコカ農民の代表だったモラレスの選挙公約であり、モラレスは現在、ボリビア国内のコカ葉の合法的な栽培面積を拡大しようとしている。

新刊書ご案内

『ボリビアを知るための68章』

真鍋周三編

明石書店 2006年4月発行 2000円

ボリビアを扱った図書は決して多くはない。そのため南米諸国の中でも「遠い国」のイメージが強いが、最近ではテレビでの番組の登場が以前に比べ多くなったようで、理解度も高くなってきたようだ。4月に発行されたこの本は、ボリビアを68章にわたって多角的複眼的な視点や思考にもとづいて構成されている。自然環境、政治、経

済、歴史、暮らし、芸術・文化、音楽等々、道の第一人者が登場執筆。当協会の国本伊代理事や音楽家の木下尊惇氏も執筆し、あまり知られないボリビアの細部にわたり丁寧に記されていて、ボリビアのエンサイクロペディアであるといっている。ボリビアを知るためには絶対手放せない貴重な本の出現はありがたい。

ボリビア百話

ボリビアの高地 - 天国にもっとも近い大地

- その 7 -

高畑敏夫
元ボリビア大使

ラパスは低地？

「一体何でこんな高いところにわざわざ首都を作ったのかな。」ラパスを訪れる日本人の多くが抱く疑問のようである(注。憲法上の首都はスクレで最高裁判所が置か

れているが、大統領政庁と国会はラパスに所在し、ラパスが事実上の首都である)。

「ここはこの辺では珍しく低いところだからですよ。」と答えると、皆怪訝な顔をする。

「皆さんがお着きになられたラパス国際空港があるエルアルト市は海拔 4,100 メートルで、富士山頂よりも 300 メートル以上も高いところにありますが、それがアンデス高原の平均的な高さなのです。広くて平らなところだからこそ 4,000 メートルもの滑走路を持つ空港を造ることができ、その周辺に 40 万人もの方が住んでいられます。チチカカ湖は面積が琵琶湖の 11 倍半もある太湖で、湖面は海拔 3,812 メートルもありますが、この辺りで特に低いところだからこそ水が溜まっているのです。そのチチカカ湖より、市街地でも 100 メートル位、さらに同市の高級住宅地であるカラクトにいたっては 600 メートルも低いラパスがこの辺ではいかに低いところであるかがよくお解りになられたでしょう。」と言う

と、皆さんは頭ではお解りになったようだが、矢張りじっくりとしない顔をしておられる。

南米大陸の最南端ティエラデルフエゴに源を発し、太平洋岸に沿って北上するアンデス山脈は当初は単一の山脈を成しているが、ボリビアに入る手前のアルゼンチンとチリの国境のプナ・デ・アタカマというところで枝分かれし、コルディリェーラ・オリエンタル(東山脈)とコルディリェーラ・オクシデンタル(西山脈)という平行山脈を形成している。そして、この両山脈の間には広さが日本の本州ほどもある広大なアルティプラノ(アンデス高原)が広がり、その大部分がボリビア領である。アルティプラノはマクロで捕らえれば幾つもの盆地に分かれており、全体としては平坦でないが、車などで南北に走っている限り道は概して平坦である。

市内に 900 メートルの落差

ところが、そのアンデス高原の平坦さが前記のエルアルトのところで突如破れ、巨大な摺鉢のような空間がぽっかりと広がっている箇所があり、ラパスの市街は摺鉢の上端から 400 メートル程下ったところに展開している。大英百科事典では『チュキアブ川の浸蝕作用によってできた深く広い峡谷』と説明しているが、現在は名も知れぬ小さな川が汚濁した水を流しているに過ぎず、この説明は空々しく感じられる。恐らく、十万年、百万年といった地質学的な単位で数えられる長い年月の間に土砂が徐々に削り取られ、運び去られた成果なのであろう。

ラパスの市街は摺鉢の中腹に展開しているので、緩急の差こそあれ町中が坂ばかりであり、まったく平らなところはほとんど見当たらず、高原部と著しいコントラストを成している。同じ市街の中でも非常な落差があるので、俄の大雨にでも見舞われると石畳の街路の敷石が剥ぎ取られたり、下水道に流れ込んだ雨水があたかも貯水ダムから水力発電所に落下する水流のような勢いで流れ落ち、その物凄い水圧でマンホールが吹き飛んだりする事故が続発する。ラ

パスの年間降雨量は 600 ミリ弱でわが国の平均降雨量の約 3 分の 1 しかないが、乾季と雨季に判然と分かれている上、雨季でもほとんどの日が晴天で、降るときは盥を覆したように降り溜めするのである。2002 年 2 月 19 日の午後ラパスで大規模な鉄砲水が発生し、多数の死傷者がでたことは記憶に新しい。

ラパスの市街よりさらに 400 メートルも低いカラコトへは市街から数本の道が通じているが、急峻な断崖を切り拓いて造ったものが多く、片側には岩山がのしかかるように聳え、雨の後などは山から落ちてきた岩石が道路を塞ぐのが日常茶飯事である。かつて自動車ほどもある巨岩が道路の真ん中に鎮座しているのを見たことがあった。エルアルトは行政上はラパスとは別の市を構成しているがラパスの衛星都市という性格が強く、首都圏内でも約 900 メートルも的高度差があることになる。

平地人にとっては想像を絶する高地であるラパスやカラコトであるが、高地先住民にとっては、高度が 3,200-3,300 メートルしかないカラコトなどは平地のようなものである。言ってみれば、ラパスはアンデス高原の街というよりは、そこを抜け出して低地に向かう道の最初の宿場といった感がある街である。

空気が平地の 3 分の 2

高地が人の健康その他生活一般に直接かつもっとも顕著な形で影響を与える最大の要因は言うまでもなく空気の密度が極端に低いことである。

極めて覚え易い数字であるが、気圧は高度が 100 メートル上昇する毎に約 1% 下がる。300 メートル近くもある横浜ランドマークタワーの最上階にエレベーターで上がると耳にツーンとくるのは気圧が 3% も一挙に下がるからである。アンデス高原では気圧は 600 ヘクトパスカル程度、即ち空気が平地の 3 分の 2 以下ということである。日本から持っていったパック食品が今にも破裂しそうにパンパンに膨れ上がっているのに驚かされる。炭酸飲料などを一気飲みする

と、我々の胃袋もこのパック食品のようになる。

天国にもっとも近い首府

世界を見渡すと、ラパス程度の高度以上のところに 1 千万人以上の人達が定住しているとされており、その約 8 割がアンデス高地に集中していると見られる。因に、残りの大部分はチベットとその周辺、これに続いてエチオピア北部高原となっている。

世界の国の首府の中で高度についての 3 強はラパス(3,700 メートル)、キトー(エクアドル、2,900)およびボゴタ(コロンビア、2,700)で、いずれもアンデス高原にあり、これらに続くのはメキシコ・シティー(メキシコ)、アジスアベバ(エチオピア)、サヌア(イエメン)の 3 都市であるが、いずれも 2,200 前後と、さらに大きく落ちる。ニューヨークでの同時多発テロに続く米国のアフガニスタンへの軍事介入で有名になったカブールは 2,000 メートルを切る。非常な高所と信じている人も多いと思われるネパールのカトマンズは僅か 1,300 メートルで、上高地よりも低く、高度について見る限り健康地である。チベットのラサは 3,630 メートルでラパスより少し低いだけであるが、独立国の首府ではない。まさにラパスは世界の国の首府の中で天国にもっとも近いところにある。

ラパスは 2 位のキトーに 800 メートルもの差をつけ、その高さは目を覆うものがあるが、もう 1 つの問題は、ラパスから陸路で低地に行くことが極めて困難なことで、その点ではキトーなどと根本的な相違がある。ラパスの低地であるカラコトから先には川のほとりに狭い未舗装の道が通じており、海拔約 3,000 メートルを僅かに切るリオアバボ(『川下』といった意味)という村に着く。ラパスからそこまで降りると花の色が目に見えて鮮やかになり、空気が濃厚に感じられる。しかし、そこから先には道らしい道がなく、事実上行き止まりとなる。川が流れているからにはそれに沿って歩けばさらに下れる筈であるが、少なくとも乗用車では行けないようである。ラパスから陸

路で低地に行くためには、低地であるカラコトの方に下らず、一旦 4,100 メートルのエルアルトに戻るかあるいは市内のピリャファティマという比較的高度の高い部分から市外に出、さらに上り道を辿って海拔 4,800 メートルもの峠を一旦越える必要があり、人の交通のみならず、低地からラパスへの物流を極めて困難にしている。

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで NO.10 杉田房子 旅行作家

「パパスをいっぱいくれたし、あのピラコチャの神父、本当に親切」

太平洋岸からカリブ海側へ、パナマ地峡を西から東へ越えるスペイン軍の輸送隊に入れられたインカの男女は、神父に見送られて出発した。入江にかかる石橋を渡る。のちにイギリスの海賊モーガンがパナマを陥落させた時、意気揚々と渡ったのでモーガン橋と呼ばれることになったこの橋の外側は、サン・ミゲル湾を通じて太平洋に開いている。

沖に見えるのはサン・ミゲル島で、冒険児バルボアがパナマで最初に見つけた財宝は、インディオがそこでとっていた真珠だった。輸送隊のなかにも真珠をぎっしり詰めた箱が揺れているが、モーガンの橋を渡って内陸へ向う道をいくと、太平洋はじきに見えなくなる。

深い密林と険しい山並みが、視界をささぎった。インカの男女は知らなかったが、実はそこで太平洋とまったく縁が切れてしまう。スペイン人が王の道というパナマ地峡横断路は、スペイン国王に仕える者が往来し、国王に捧げる物が運ばれるために造られた。道は一路スペインにだけ通じていたのだった。

けれど、道そのものは王道どころか、酷い悪路で兵士も尻込みするほど険しい。折り重なる山は、タラマン山脈がつきると聖

プラス山脈につづく。間には、群がるマラリヤ蚊が熱病の狂気を起こさせるので名づけられたマドン湖沼があり、鱒がうじゃうじゃひそむチャグレ河の峡谷がある。パナマで一旗上げるのに目の色を変えている者から、インカの国で黄金を握ろうとする者まで、スペイン人は全員があえぎあえぎこの道を西にたどるのだが、財宝を満載して逆に東へ向う輸送隊も息をあえいだ。

モーガンに先立つイギリスの海賊ドレークが、この輸送隊に目をつけて襲ったことがあるが、あまり隊列が長いので、全部は襲いきれなかったのを無念がっている。それでも、銀だけで30トンも奪ったという。見当もつかないそれほど莫大な財宝を、一片でも失ってはならない輸送隊は、盗賊と紙一重の違いしかないやくざな兵士や、隙さえあれば逃亡しようとするインディオの人夫に対する厳しい監視で、王の道をいく地獄の行進と呼ばれるほどひどい旅だった。

インカの男女は、食物をロバの背に乗せてその道をいく。南米のアンデス山脈をリヤマに揺られて下ったじゃがいもの袋は、今度はロバでパナマ地峡の聖プラス山脈を登った。

このロバという動物は、インカから連れてこられたインディオにはまったく謎だった。

ピラコチャのスペイン人が乗る馬そっくりの形なのに、その半分もないアンデス山地のリヤマくらいの大きさしかない。それなのに、リヤマなら立ち上がれもしない重荷を平気で運ぶ。

現に、人間が汗まみれで息をきらしている山道を、体が隠れそうなじゃがいもの大袋はもちろん、金銀や真珠のぎっしり詰まった箱を背に、とことこと休みなしにいく。

「ロバはアフリカに生まれ、ヨーロッパで育て、大西洋を越えて連れてきたのだよ」

親切な神父の説明も、インカの男女には謎解きにはならなかったが、この小さな動物がいたりきたりできるなら、長い旅をするといわれている自分たちも大丈夫だろう、と一安心する助けにはなった。

(つづく)

ボリビアは心のふるさと

食べ物に関するあれこれー

細野 豊（詩人）

ボリビアには、1974年6月から79年4月まで、海外移住事業団（JEMIS）及び国際協力事業団（JICA）の職員として滞在した。最初の3年間（77年6月まで）はサンタクルス支部に勤務し、この間の74年8月にJEMISと技術協力事業団（OTCA）が合併して、JICAになった。後の2年間（79年4月まで）は、ラパスの日本大使館に、JICA職員の身分は残したまま、「大使顧問」という耳慣れない肩書を貰って勤務した。

JICA（とその前身）で過した約40年の歳月を振り返ってみると、愉快的思い出ばかりではないが、ボリビアに在勤した5年間は比較的有意義で充実した時期だったと言える。そこで、あの頃のことを食べ物にまつわる思い出を中心に掘り起こしてみようと思う。

サンタクルス在勤時代には、食べ物にかかわる思い出が山ほどある。真っ先に思い出すが、レストラン「ドン・ミゲル」の焼肉だ。焼肉と言っても、フィレとかロースとかのいわゆるまともな牛肉はいわば付たりで、主としてチンチュリン（小腸）リニオン（腎臓）イガド（肝臓）などの内臓を、四角い鉄の容器に入れた炭火の上に鉄板を置いて焼くのだ。もともとは、アルゼンチンの gaucho（牧童）の料理だったらしく、野趣溢れる逸品である。ちなみに、このレストランの主人はアルゼンチン人だ。ぼくは初めの頃、チンチュリンが好きだったが、時が経つにつれてリニオンに傾倒するようになった。

暑かった一日が過ぎて涼しい風が肌を快く撫でる日暮どきに、「ドン・ミゲル」の中庭のタマリンドの木陰に並べられたテーブルを囲み、冷えたビールを飲みながらこの焼肉をいかにも小刀といった形のナイフと先の尖ったフォークで切り分けて食べる夕食は、南国ラテンアメリ

カの町にふさわしい風情があった。

その頃のサンタクルス市は、石油開発が盛んになったため、三十万人以上の人口を抱えるボリビア第二の都市に成長していたが、新興住宅地区は別として、市の中心部には家々の赤茶けた瓦屋根の上に小さなサボテンが生えていたりして、古きよき時代の田舎町の面影が残っていた。

JICA 東京本部や外務省からおいでになった大事なお客様も、サンタクルス滞在中に一度はこの「ドン・ミゲル」にご案内したが、反応はいろいろだった。中には食通の方もいて、そういう人は「これはなかなかいける」と喜んで下さったが、大方の評判はさほど芳しくはなかった。「肉食獣は、獲物を捕らえると先ず内臓を食べると言われているように、一番おいしいのは内臓です。どうぞ召し上がって下さい」とお勧めしたところ、「きみ、あまり脅かさななくてくれたまえ」といやな顔をされたこともあった。最近では、サンタクルス市も人口百万人以上の大都会になってしまい、2000年7月に旅行で立ち寄った折には、アメリカ風のレストランが巾を利かせていた。「ドン・ミゲル」がどうなっているか、確かめそこなってしまった。

次に思い出すが、サルテーニャだ。これはエンパナダ（肉、野菜などを詰めたパイ）の一種で、形は餃子に似ている。栗色に焼きあがったのを見るといかにも旨そうだ。がぶりとはぐむと中から香辛料の匂いいっぱいのおリーブ油が溢れてくる。サルテーニャという名前の由来は、アルゼンチン北部のボリビアとの国境に近い都市、サルタから伝わってきたエンパナダということかと推測される。サンタクルス市の旧市街のはずれ、新興住宅地区との境目辺りにわれわれ一家は住んでいたが、わが家から道路を隔てた斜向かいにサルテーニャを作って売っている小さな店があり、時々その店から買ってきて、同居人も含めた家族全員やひんぱんにわが家やって来る友人や知人たちと一緒に食べた。

もちろん、いつも焼肉やサルテーニャばかり食べていたわけではない。外国で生活してみると、日本人がいかにも日本食にこだわる民族であるかがよく分かる。外国で生活する日本人にとって、いかにして日本食の材料を確保するかが常に大問題であり、このことで一番苦労するのが家庭の主婦だ。わが家も例外ではなかった。当時のぼくはそこまで気が回らなかったが、今になって「女房は大変だっただろうな」と思う。

朝食にはご飯と味噌汁が欠かせなかったし、昼食や夕食には肉も食べたが、刺身や揚げ物が欲しかった。1970年代当時、米はサンフアンやオキナワ移住地で栽培されていたので、日本米に近いもの（加州米）を手に入れることが出来たし、豆腐や蒲鉾やさつま揚げなども移住地やサンタクルス市在住の日本人たちが作っていた。蒲鉾など川魚のすり身だけで出来ており、混ぜ物が入っていないので、日本製のものより味がよい位だった。

醤油や味噌も同様に現地製のものもあったが、主として、当時既に国際ブランドになっていたキッコーマンの缶入り醤油や日本、ブラジルなどから輸入された味噌をスーパーや日本人経営の食料品店で買った。胡瓜、茄子、大根などの日本野菜もメルカード（市場）にJおばさんが出している店などで買うことが出来た。

日本食確保をめぐることは、このようにいろいろなことがあったが、中でも強く印象に残っているのが生魚のことだ。サンタクルス市は、海から遠く離れた内陸にあったので、生の海産物はたまに冷凍の蛸がスーパーに入荷する以外、まったく入手不可能で川魚に頼らざるを得なかった。サンタクルス市から数十キロ離れたサンフアン移住地近くを流れるヤパカニ河（アマゾン河の上流）の魚である。

よく憶えているのは、サンタクルス市在住のSさんと息子さんがバクーという形が鯛によく似ていて黒みがかかった魚を小型トラックに山のように積んで売りに来たときのことだ。確か二月か三月の暑い盛りだった。Sさんはサンタクルスを

生活の本拠にしておられたが、サンフアン移住地にも家と農地を持っていた。その家からヤパカニ河へ出向き、思いがけず大漁だったので、サンタクルスの日本人たちの食卓を賑やかにしてやろうと運んで来てくれたのだ。

バクーという魚は、形は鯛に似ているが、小骨が多くて捌くのが容易でなく、川魚特有の臭いもあったが、当時刺身にして食べられる魚はこれしかなかった。女房が、現地に長く住んでおられる日本人の奥さん方に刺身にするやり方を教えてもらい、レモンをたっぷりかけ、山葵はなかなか手にはいらない貴重品だったので、辛子醤油で食べた。海の魚には及ばなかったが、生魚に飢えていた身にはけっこうなご馳走だった。

川魚なので、生で食べると肝臓ジストマにやられるのではないかと心配だったが、何でも「日本のさる高名な学者がヤパカニ河で調査したところ、ジストマはいないことが分かった」と実しやかに語られるのを信じるほかはなかった。あれから約30年経った今になっても、わが体内に肝臓ジストマが巣くっている気配はないので、あの説は多分本当だったのだろう。

ほかに、ドラードというやはりヤパカニ河で獲れる鯉に似た魚もあったが、これはどのように料理して食べたか記憶がない。蒲鉾やさつま揚げの材料になっていたのかも知れない。

（次号につづく）

革命の夜

沖縄ポリビア協会相談役 上原盛毅

夕食後も男達だけで一杯やっていい加減酔いがまわっていたが、どうも収まりが悪い。Tがクンビアの軽快なリズムにつられるように云った。

「どこか女ッ気のあるところで呑みなおそうや」

「サンタクルスって美人の産地というだろう。拝みたいね」Yが応じる。

「沖縄を出てから十日経つもんな。仕事も一段落したし、この辺で息抜きしていいだろう」Kが俺を見る。オキナワ移住地の製油工場建設のために派遣された技術者たちは元気である。結局、宿舎からトヨタの六三年型ランドクルーザーを引っ張り出し、四人で外に出た。

午後十時を過ぎたばかりというのに、街は静まり返っていた。街外れのキャバレーへ向けて二丁ぐらい走らせただろうか。突然、二人の男が道路の真中に飛び出して、銃を構えながら、止まれの合図をした。慌ててブレーキを踏むと、横から更に二人が銃を向けながら近づいてきた。服装からみて民兵らしい。コチコチに緊張している。

民兵の一人がランクルの踏み台に片足を乗せて、運転している俺のわき腹に銃をつけたまま、真直ぐ行けとあごをしゃくる。反対側には軽機関銃を持ったのが車内に銃口を向けている。

「私達は日本人だ。怪しいものではない。私はこの町に住んでいるが、友人の三人は日本から来たばかりの技術者で、これからサロンSに飲みに行くところだ。悪いのならそのまま引返してもいい」と言っても無言で取り合わない。正規兵なら訓練されているから無茶はしないが、緊張と興奮で民兵は何をするか分からない。彼らの指示に従って五丁ほど行くと正規兵で固められた駐屯所で下ろされた。ここでも日本人の技術者だから帰してくれと頼むが相手にされない。

どうやら革命が起こったらしい。一月前から与党MNR内部の主流派対反主流派の抗争が激しく、夜中に銃撃戦を繰り広げるような政権末期の混乱が続いていたが、ついに軍人出身の副大統領派が蜂起したという。

ボリビアは1825年の独立以来、政情が安定せず、大統領の数が独立してからの年数よりも多いといわれるくらいだ。現政権は中道左派でアメリカとも上手く付き合って12年間統治してきたが、結局は身内の反乱により崩壊することになったというわけだ。

俺達はさらに町の南外れにある第8連隊に連れて行かれた。そこで車の鍵を取り上

げられ、体育館の半分位ある大部屋の中に入れられた。裸電球が四つぶら下がっているほかは何も無い。座る椅子すらも無い。目が慣れてくるとすでに三十人ばかりの先客が蹲ったまま無言で俺達を見詰めていた。

空いた壁際の一角に取り敢えず場所を確保した。酔いのせいか余り恐怖感はないが、四人とも殆ど口を利かない。俺は何度も入り口の格子戸から見張り兵に声をかけるが、無視された。

一時間ぐらい経ったとき、太った大男が三人の兵士に連れてこられた。男は中に入れられることに激しく抵抗した。

「冗談じゃない。お袋が急病だと言うので、看病に駆けつけるところだったんだ。何も悪いことをしていない。政治にも関係していない。お袋が危篤なんだ。すぐ帰してくれ」

「つべこべ言わずに中へ入れ」

「いやだ。帰してくれ。あんたがた革命軍は人民の味方だろう。弱い者を助けるために革命を起こしたのだろう。お袋は可哀相に一人で死にそうなんだ。助けが必要なんだ」

「駄目だ、中へ入れ」と銃をつきつけ三人がかりで強引に押し込んだ。

「これだけ頼んでも分からないのか。何が革命軍だ、君達も今までの政治屋とおんなじだ。人民のためだと抜かして私腹を肥やすんだ。革命が聞いてあきれらあ。今までだって・・・」と悪態をつき出した途端、一人の兵士が銃尻で男の腹を思いきり叩いた。うっと前屈みになるところを別の兵士の銃尻が顔面を捉えた。グスッと鈍い音をたて男は大の字にのびた。兵士たちはそのまま出ていったが、暫らくは誰も助けなかった。

兵士たちは殺気立っているし、夜明け前にトラックに積み込まれ、郊外の林の中で銃殺され、密かに埋められでもしたら永久にわからないことになる。事態は深刻といえた。

丁度午前二時になった時、司令官らしい将校が二人の兵を連れ、巡回に来た。この機を逃すとチャンスは無いので、努めて落ち着いて丁寧な話しかけた。

「司令官殿、私達四人の日本人は日本領事館のパーティの帰りに、ここまで連行されました。この国が非常時にあることは十分承知していますが、私達が巻き込まれたとなると領事館でも大騒ぎになります。日本にも報告されることになりますので、少なくとも私達の居場所を知らせておく必要があります。電話をお貸し願います」

彼は突然の日本人の申し出に一瞬驚いた顔をしたが、すぐに兵士に命じて俺達を出し、司令官室に招き入れた。

「知らないとはいえ失礼した。非常事態であることを理解願いたい。革命は成功し、我々が国全体を掌握した。日本政府にも明日正式に通知する。あなた方も今夜は帰ってよろしい」と言って、ランクルの鍵を返してくれた。途中危険ではないかと質問すると、すでに治安は回復しているから大丈夫、何かあれば、彼の名前を言えば通してくれると言う。若い、二十代半ばの中尉で、この地区の副司令官であった。

街の中は全く静かで、満月の光がやけに明るかった。大通りを暫らく走っていると不意に横から装甲車が現れ、止まれの警笛を鳴らした。Kが逃げろと言ったが、逃げられるはずはないのでブレーキを踏んだ。兵士が十人ばかり飛び出し、散開して、車を囲み、銃を構えた。正規兵の動きに隙はなかった。俺だけ両手を上げ、運転席から降りながら、

「私達日本人四人は今、第八連隊の副司令官フェルナンデス中尉の許可を得て、帰るところです。不審があれば問い合わせ願います」と大声で説明した。

彼らは用心深くすぐには近寄らないので、距離を保ちながら押し問答していると、幸いにもさっきの副司令官がサイドカーに乗って巡視にやってきた。ホッとすると同時に、危うく射殺されそうになったので、危険だから兵士を護衛につけてもらいたいと申し入れると、笑いながら彼が護衛すると言って、サイドカーを先導させた。俺達のランクルの後ろからはアメリカ軍払い下げジープがついて来た。兵士が五人乗っていた。

宿舎に着くと、革命軍のために祝杯をあ

げたいから、寄らないかと誘うと気軽に応じた。日本人をぶち込んだ後ろめたさと好奇心もあっただろうが、革命軍が政権を完全に掌握した余裕ともいえた。

ラジオ放送は国歌を流しながら、革命軍が政権を掌握したことだけを繰り返していた。アルゼンチンワインの栓を抜き、皆で革命成就に乾杯した。中尉は出されたつまみをよく食べた。特に、塩煎餅が珍しいのかチーズを乗せて口に入れながら日ボ親善だとはしゃいだ。ボリビアの士官学校を出て、アメリカのウェストポイントに留学した秀才らしいが、まだ青さの残る良家の坊ちゃんと言う感じで、とても革命軍を率いる指揮官にはみえない。

外で待機している兵士たちにもフランスパン二本とチーズを手渡すと歓声を上げた。彼らは一日中殆ど食べていないらしかった。

十分近くいて、「落ち着いたら今度は第八連隊に正式に招待する、乗馬でもしよう」と言い残して去って行った。さわやかな印象で、革命軍に対しても好感が持てた。

翌日の新聞は大見出しが踊り、革命の克明な経過や新大統領の長い声明文、閣僚の写真や経歴の記事で埋め尽くされていた。前大統領や主要閣僚、政党幹部は殆どが隣国へ亡命して、逮捕されたのは政局に関係の無い小物ばかりだった。十二年間統治していた政府にはあっけない幕切れだった。双方に犠牲者らしい犠牲者は出ていなかったが、新聞の片隅に、「第八連隊副司令官パウロ・フェルナンデス中尉が巡視中に流れ弾に当たって死亡、享年二十五歳」と報じられていた。

親の想い、子の選択

序章

本研究の動機と目的と方法について

武庫川女子大学 生活美学研究所
助手 柏木 舞子

第1節 研究の動機と目的

ボリビア共和国に、沖縄出身の日本人の移住地がある。名前を「コロニア・オキナ

ワ」という。そこに暮らす人々の生活様式と価値観には「日本」「沖縄」「ポリビア」という、3つの文化的アイデンティティが交差している。こうした状況は「移住」という人間の空間移動と「世代の交代」という人間の時間移動によってもたらされたと考えられる。

本論文の目的は、「移住」と「世代の交代」によってもたらされた、コロニア・オキナワの人々の生活様式と価値観の変容を描きだすことにある。そのために、主たる関心の焦点を「進学」「就職」「恋愛と結婚」など、人生の折り目節目にあてることとする。その考察として、コロニア・オキナワというひとつの日系コミュニティの将来像を展望したい。

このような問題意識を持ったのは6年前のことである。大学1年生の冬、たまたま旅行した沖縄県八重山諸島で、離島の物流と人々の経済観念に興味をひかれた。そこで、司馬遼太郎記念財団のフェローシップに応募し、それが採択されたため、八重山諸島をはじめとする沖縄県の離島地域で、フィールドワークを実施する機会を得た。大学2年次以降の長期休暇は、すべて沖縄県で過ごしたほどである。

その過程で見聞したことは多い。「もうひとつのオキナワ」ポリビアにある日系移住地コロニア・オキナワの存在を知ったのも、そのひとつである。

きっかけは、2001年11月、沖縄県で開催された第3回世界のウチナーンチュ大会⁽¹⁾である。この事業の一環として、沖縄県出身者が形成する各国の日系コミュニティの様子が、マスメディアによって報道された。その中で、とくに筆者の目を引いたのが、ポリビア共和国サンタクルス州にあるコロニア・オキナワであった。

それだけではない。新聞記事などから、そこに住む人々が、現在でも日本、とりわけ沖縄の文化を生活の中に色濃く残していることが分かった。テレビ映像からは、さまざまな行事の際に、日系2世・3世を中心とした若者が沖縄エイサーを行うことを知った。

これら「沖縄」そのものを彷彿とさせる

素朴な生活風景を目にしたことから、海外に生きる沖縄県人のライフスタイルへの興味が呼び起こされた。すなわち「ポリビア」「日本」「沖縄」という3つの文化が、日系コミュニティの中で、どのように受容され、息づいているのか。このことに、強い関心を持つようになったのである。

さて、沖縄県民の移住の歴史は、1899年にさかのぼる。この年、26人の契約移民がチャイナ号でハワイに渡航したのである⁽²⁾。

同じ年に、南米への移住者も日本を出発した。791人が、佐倉丸でペルーに移住⁽³⁾した。その一部が、ゴム景気に沸いていたアマゾン流域のポリビア北部、ベニー州リベラルタ市に転住⁽⁴⁾する。このことが、コロニア・オキナワ誕生のきっかけとなったというのである。

それから50年が経ち、第2次世界大戦が終わった。リベラルタ市に住んでいた沖縄を出自とする日系人たちは、米軍の支配下にある母県の人々の、苦渋に満ちた生活ぶりを知った。その解決策として、ポリビアにオキナワ村建設の構想を打ち出すことになる。そして、琉球列島を統治していた米国民政府のもとで、ポリビアへの移住を実現させたのである。という意味において、コロニア・オキナワは、19世紀における南米の沖縄移住者の起源を継いだものであるといえる。

その後、コロニア・オキナワは1998年に、ポリビア共和国政府の正式な行政区に指定され、「オキナワ村」となった。このように行政区の名称に「オキナワ」の名が冠されているのは、世界中で、沖縄県とコロニア・オキナワだけである。以来、コロニア・オキナワは「もうひとつのオキナワ」として、その名が広く知れ渡るようになっていった。

その「もうひとつのオキナワ」が、2004年夏に、入植50周年⁽⁵⁾を迎える。半世紀の歴史を経た現在、コロニア・オキナワは、今後の移住地のあり方をめぐって、大きな岐路に立たされている。なかでも、最も深刻な課題のひとつが、ポリビアへの「同化の是非」をめぐる問題であろう。

たとえば、コロニア・オキナワにある「オキナワ第一日ボ学校」のカリキュラムであ

る。この学校は、日系人子弟の通学する私立学校のひとつだが、中南米の日系人学校の中で、日本語教育に充てる時間が最も多いことで知られている。

ところが、そのカリキュラムに疑問を感じる人も少なくないらしい。さらに、

「もはや日本語教育は不必要なのではないか」

と言う声も聞かれるという。教育という、ゆるぎない理念のもとに行われるべき事業に関して、必ずしもコミュニティ全体の意思が一致していないらしいことが分かる。

その背景には、子弟に日本文化を伝えることの可否にかかわる価値観のゆらぎがあるのではないだろうか。これと同様のことは、日系人の家庭教育にもみられるといていいように思われる。たとえば、ある日系1世は、

「日本人なのだから、ちゃんとしなさい」

というしつけの仕方をする。しかし、そのたびに、日系2世である彼の息子と意見の衝突が起こるのだといった。このことは、世代が異なると「日本人だから」という言葉の意味するところが「ずれている」ことを物語っているということではなかろうか。

これと同様、ないしは類似の、いわば「現地への同化」という現象は、今日、ポリビア以外の、世界各地にある日系コミュニティにおいても引きおこされているらしい。たとえば2003年の夏に、ポリビアのサンタクルス市で開催された第12回 汎米日系人大会⁽⁶⁾において、日本語を理解する人々は、ポリビアとパラグアイの日系人だけであった。

この点では、コロニア・オキナワは、全米の日系社会の中で、むしろ「希有なコミュニティ」として注目されている。そこには、いまなお「日本」、とりわけ「沖縄」の文化が多方面に残されているのである。

つまりコロニア・オキナワは、一方において日系人社会が被っている世界普遍的な「現地への同化」という変化の方向を目指しつつある。しかし他方では「いまだ日本（沖縄）の文化を相当程度、保存している」のである。こうした地域に生きている人々は、今後どのように自らのコミュニティを

導いていくのか。そのことは、世界各地の日系社会のみならず、いわゆるグローバルゼーションの大波にたゆたう21世紀の日本社会のありかたを見つめ直す上でも、一定の有効性を持ちうるのではなかろうかと考えている。 -以下次号につづく-

(なお、本研究は「旅の文化研究所」の協力を得てなされたものです。)

編集後記

「カントウータ」がスタートしてアツという間に10号を迎えました。雑誌など新しくスタートしても大体3号まで続けばいいとさえいわれていますが、皆様のご協力の賜物で10号まで成長いたしました。

年2回の発行は日数的にもきつくないと安心しておりますと、アツという間に半年は過ぎ去り、バタバタと編集作業に入ります。しかし、この手の刊行物としては質の高さ、執筆者陣の格の高さから、ありがたいことに高い評価をいただいております。

お若い方にもお仲間に入っていただきたいのですが、ご多用でなかなかご無理。今や団塊の世代が定年をお迎えとか、いつまでもお若くお元気の活力源はご自分の能力をいつまでも発揮し続けることですから、是非当協会にお入りいただき、「カントウータ」のお仲間になって下さい。ご協力からお願いいたします。

ポリビアで体験なされたことなどお書きになってお寄せください。原稿は800字から1200字でお願いします。

なおパソコンを利用できる方はワープロで原稿を作成し、E-mailまたはフロッピー、メモリースティックなどでお送り下さると大変ありがたいです。自己紹介の意味でポリビアとの関わりを数行お書き頂いた上で本題に入っていただくとありがたいです。

よろしくお願ひいたします。
.....

(編集委員)
杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊
(広報委員)
渡邊英樹、長嶺為泰、細萱恵子